
私が知るほんの幾つかの回顧録と 評伝について（続）

佐々木 卓也

このほど雑誌委員の米村幸太郎教授より、『法学周辺』61号への寄稿を依頼され、喜んでお引き受けした。ただ何をテーマに書いて良いのか、なかなか妙案が思いつかず、結局本誌第51号（2020年3月）に掲載した拙稿と同じテーマを選んだ。今回紹介する本もまた前回に続き、私が専攻するアメリカ政治・外交、日米関係に関わるもので、日本語訳版を使用している。すべての本は現在も入手可能で、大学図書館で（山手線コンソーシアムの利用を含め）借り出すことができる。

まず、2024年11月の大統領選挙で再び咲きを果たしたトランプの自伝から始めるべきであろう。ドナルド・トランプ&トニー・シュウォーツ『トランプ自伝—アメリカを変える男』（早川書房、枝松真一訳、1988年）は内容というよりも、自らの不動産経営哲学と「取引（ディール）の技」を自信たっぷりに語る様子にトランプの人となりが見え出しているところが、最も興味深い。トランプの評伝はすでにおびただしく刊行されているが、彼の性格や個性を知るには格好の本であろう。彼がビジネスマン時代に培ったメディア操縦法、さらには対日観も示唆に富む。本書は後に『トランプ自伝—不動産王にビジネスを学ぶ』（相原真

理子訳、ちくま文庫、2008年)として文庫化されたが、早川書房版の邦語タイトルの副題は未来を見通したようで、実に予言的である(英語原題は、*Trump: The Art of the Deal*)。なお共著者(実際にはゴーストライター)のシュウォーツは後年、本書の執筆に協力したことは「人生の最大の後悔」であると述懐している。

トランプ現象で一躍注目されたのが、いわゆるラストベルト地帯の経済的・社会的苦境である。第二期トランプ政権で副大統領を務めるJ・D・ヴァンスが2016年に刊行した『ヒルビリーエレジー—アメリカの繁栄から取り残された白人たち』(関根光弘・山田文訳、光文社、2017年)は数百万部を売り上げるベストセラーになった。1984年生まれのヴァンスは貧困家庭に育ち、主に祖母に育てられた。私はこの本によって、アパラチア山脈沿いの失業、家庭崩壊、オピオイドの問題—ヴァンスの母親はオピオイド中毒に苦しむ—などの実態、さらには白人貧困層の社会的・文化的疎外感をおそらく初めて知るとともに、米軍が新人兵士に施す社会教育の説明に興味を覚えた。ヴァンスは高校卒業後すぐに海兵隊に入隊し、そこで銀行口座の開設、相見積り取り方、ローンの組み方など社会生活の基本を教えられる。アメリカの軍隊は、難しい家庭に育った子弟が適切な社会生活を送る作法をたたき込む役割も担っているのである。ヴァンスはやがて連邦上院議員に当選し(2022年)、政界入りを果たす。彼はちょうどその頃、「全米保守主義会議」の年次総会で「大学は敵である」と題する演説をおこない、「教授は敵である」と述べて演説を締めくくる。トランプ政権が現在進めているエリート大学に対する厳しい締め付けを予告するような内容であり、私はこの演説をユーチューブで閲覧し、愕然とした記憶がある。

<https://www.youtube.com/watch?v=0FR65Cifnhw>.

ヴァンスはエール大のロースクールの同級生の女性と結婚する。彼女

はインド系アメリカ人である。このところアメリカの政財界で躍進著しいエスニックグループは、インド系である。実に多くの巨大企業の現在（あるいはつい最近）のトップはインド系（グーグル、マイクロソフト、ユーチューブ、マスターカードなど）が務めており、政界でも第二期トランプ政権でFBI（連邦捜査局）長官に就いたパテルをはじめ、2024年の共和党大統領予備選挙に出馬した実業家のラマスワミ（今年選挙があるオハイオ州知事をめざしている）、トランプと最後まで共和党候補の座を争ったヘイリー元国際連合大使（元サウスカロライナ州知事）がいる。そしてもちろんこの年民主党候補に選ばれたのが、ジャマイカ系の父とインド系の母を持つカマラ・ハリス副大統領である。ハリスは主要な党の初の女性大統領候補である。彼女の『私たちの真実—アメリカン・ジャーニー』（藤田美菜子・安藤貴子訳、光文社、2021年）は原著刊行が2019年ということで、明らかに2020年の大統領選挙をめざす政治的マニフェストであった。そのせいであろう、お行儀のよい内容でそつなくまとめた感があり、今一つパンチ力不足であった。そういえば、今年1月にニューヨーク市長に就任したマムダニ（民主党）はウガンダ出身のインド系を両親にもつイスラム教徒である。

トランプ大統領の政治スローガンは「アメリカ第一」であるが、私がそれを最初に目にした時、すぐにリンドバーグの「アメリカ第一委員会」を思い浮かべた。リンドバーグは1927年に初めて大西洋単独無着陸飛行に成功した人物で、戦間期アメリカの最も有名な英雄であり、いわゆるスーパーセレブであった。リンドバーグ夫妻が1931年8月下旬、アリューシャン列島、千島列島、根室、霞ヶ浦を經由して（もちろん自ら操縦する）水上飛行機で来日した際には、訪れた先々で大歓迎を受けた。夫妻は約三週間の滞在を終え、福岡から南京に向けて9月19日に出発するが、それは偶然ながら関東軍が満州で軍事行動（満州事変）を開

始した翌日のことであった。リンドバーグの運命はこのアジア旅行から帰国した直後に起きた幼い愛息の誘拐殺人事件もあって暗転する。彼はやがてヒトラーと反ユダヤ主義に傾倒し、第二次世界大戦が始まると、F・D・ローズヴェルト政権の親英政策に反対し、孤立主義者を糾合する「アメリカ第一委員会」を代表するスポークスマンとして活動する。A・スコット・バーグ『リンドバーグ—空から来た男』（上下、広瀬順弘訳、角川文庫、2002年）はこの毀誉褒貶の激しい人物の人生をたどった素晴らしい本である。この本が刊行された後、リンドバーグが大戦後にドイツで密かに三名の愛人を得て、しかもそれぞれとの間で子供を設けていたことが明らかになった。リンドバーグは波乱万丈の、そして何とも複雑な人生を送ったのである。

アメリカの第二次大戦への参戦は日本軍の真珠湾奇襲攻撃を契機になされた。真珠湾の衝撃で全米で反日感情が高揚し、ローズヴェルト政権が西海岸に居住する約12万名の日系アメリカ人を強制抑留に処する措置にでたことはよく知られている。アメリカ史の汚点の一つである。ただこの措置に対して、カー・コロラド州知事（共和党）が勇氣ある行為をとり、日系アメリカ人を守ったことはほとんど知られていないであろう。アダム・シュレイガー『日系人を救った政治家ラルフ・カー—信念のコロラド州知事』（池田年穂訳、水声社、2013年）は戦時という異常な事態下で日系人に対する猛烈な差別感情が横溢するなか、そして身体的な脅迫を受けながらも、アメリカ市民である日系人の保護に尽力したカーの伝記である。合衆国憲法に忠実なカーの行動はアメリカの民主主義に対する信頼と敬意を高めるものである。カーはリンカーンを深く尊敬していたという。しかし政治家カーのキャリアは日系人に対する寛大な姿勢の故に絶たれてしまう。彼は州知事を退任後連邦上院議員に転出をはかるが惜敗し、その後公職に復帰することは叶わなかった。

20世紀前半の日系アメリカ人の苦闘は、ハワイ出身で、日系人として初めて連邦下院議員・上院議員に選出されたダニエル・イノウエが自らの半生を振り返った『上院議員ダニエル・イノウエ自伝—ワシントンへの道』（森田幸夫訳、彩流社、1989年）に詳しい。イノウエは第二次大戦中の米軍のなかで最も多くの死傷者を出した442連戦部隊に所属し、イタリア戦線で右腕を失った。帰国後イノウエは重傷が癒えて、ハワイに帰る前に立ち寄ったサンフランシスコの理髪店で、日系人であることを理由に散髪を断られる。戦後もなおも根強いアメリカ社会の人種差別と反日感情を示す出来事である。われわれは、80数年前の日本の軍事行動の重い代償を日系アメリカ人（さらにはカナダや中南米の日系人）がさまざまな形で払わなければならなかったことを、忘れてはならないと思う。

20世紀アメリカを代表する知識人である W・E・B・デュボイスは「20世紀の問題はカラーラインの問題である」と述べたが、21世紀に入っても人種差別問題は依然として深刻である。この問題に関係して、二人の黒人女性と一人のアジア系女性の自伝を紹介したい。まずコンドリーザ・ライス『コンドリーザ・ライス自伝—素晴らしいありふれた家族の物語』（中井京子訳、扶桑社、2012年）である。ライスは黒人女性として初めて国家安全保障担当大統領補佐官と国務長官を務めた人物であり、公職時代の回顧は『ライス回顧録—ホワイトハウス 激動の2920日』（福井昌子ほか訳、集英社、2013年）に譲るとして、こちらの本は、アラバマ州バーミングハムに生まれ育ったライスの極めて個人的な回想録である。なかでも、1963年に市内の黒人教会が白人史上主義者によって爆破され、彼女の友人を含む4人の少女が亡くなった悲惨な事件、ライス一家が旅行をする際には当時の南部社会の厳しい人種隔離制度の故に、白人限定のレストランやホテルを避ける旅程を組まなければ

ならない苦勞など、胸が痛むエピソードが紹介されている。ライスはまた本書にて、スタンフォード大学教授時代、1980年代に日本の防衛大学校で客員教授を務めた時の経験も述べている。その経験は彼女にとって愉快的ことばかりだけではなく、ライスが描く当時の日本社会の状況に私は読んでいて身をすくめたことを覚えている。

次に取り上げるのは、ダニエル・アレン『マイケル・Aの悲劇』（那波かおり訳、筑摩書房、2022年）である。アレンは政治哲学を専攻し、母校のハーバード大で教鞭をとるまさにエリートであるが、彼女の従弟マイケルは青年期のほとんどを刑務所で過ごし、29歳の時、ロサンゼルスの上で射殺死体となって発見される。オバマが大統領に就任して半年後の2009年7月のことである。ダニエルとマイケルの人生は余りに対照的で、二人の間には途方もないギャップが存在する。マイケルが陥った隘路と悲劇には言葉もなく、アメリカ社会の宿痾というべき人種差別問題、そして司法制度のあり方には暗然とする。

最後に、少しだけ気持ちが明るくなるのが、ミシェル・クオの『パトリックと本を読む一絶望から立ち上がるための読書会』（神田由布子訳、白水社、2020年）である。著者のクオは台湾出身の両親を持つアジア系二世であり、ハーバード大を卒業後、教育支援NPO（Teach for America）を通じて最も貧しい地域の高校に教員として派遣され、やがてパトリックという名の黒人生徒を担当する。極めて知的ながら、素行に問題を抱えるパトリックは殺人事件を起こしてしまい、拘置所に収監される。その時はすでにロースクールに進学していたクオはパトリックの境遇を知り、彼と二人だけの読書会を行うために定期的に拘置所に通い始める。本書の主要なテーマは、この読書会を通じて得られるパトリックの精神的・知的成長であろうが、クオが高校生相手に活用する教材が詩、小説、評論など多岐にわたり一松尾芭蕉や小林一茶の俳句、杜甫

の詩も含まれる一、教材の選択に工夫がなされていることに、教員の一人として感心した。本書については、コロナ禍の2021年秋学期、久しぶりに再開した対面授業で、全カリ立教ゼミナールのテキストの一冊として輪読したことは、良い思い出である。

確かハンフリー元副大統領であったか、外交は内政の延長である旨述べたことがある。私はトランプの（再）登場以来、外交が国内問題と密接に関係していることを改めて痛感し、内政関係の文献にあたるが多くなった。トランプ現象は私がこれまで良く知らなかったアメリカの一面を明らかにしており、外国研究を進めるさらなる意欲と刺激を与えてくれる。アメリカについて得た新たな知見を授業に活かし、学生に少しでも還元することが、私の残り少ない教員生活の大事な課題ではないかと思う。それからもう一つの大事な課題は、随分前にある出版社からお話があったアメリカ外交史のテキストの執筆を少しでも早く終え、出版することである。